◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆ 愛媛県立図書館 読書会協力図書

新規受入セットのご紹介(一般向け) 平成 29 年版目録掲載

1 人生を考える(哲学・宗教)

186 「めんどくさい」をやめました。

やましたひでこ著 祥伝社 2015(平成 27)年 185p

『断捨離』の著者やましたひでこが注目したのが口癖。 家よりも身近な環境である言葉は、自分の思い込みが 表れる。言葉は使い方しだいでゴミにも宝にもなる。自 分と言葉との関係を見つめ直せば、人生を調えていけ るはずである。

2 歴史の旅・地理の旅

291 日本人のひたむきな生き方

松本創著 講談社 2015(平成 27)年 233p

すぐ隣にいそうな7人の日本人。しかし、いずれの人も 平坦な人生など送っていない。様々な運命に翻弄され ながらも長い時間をかけて、その人にしかできない仕事 を成し遂げた日本人である。自分を信じ、ひたむきに取 り組む姿を追った。

37 親と子・教育問題

3883 奔走老人 あなたの村に学校をつくらせてください

谷川洋著 ポプラ社 2016(平成 28)年 230p

定年前に最愛の妻を亡くし、義母を見送り、3人の息子も巣立った。「中2階の人生は歩かない」と第二の人生を模索していた谷川氏が選んだ道は、アジアのへき地に「学校」を作る仕事。「人の役に立ちたい」情熱と元商社マンの行動力で奔走し、12年間で220余りの学校を設立する。谷川氏は熟年世代にこう呼びかけている。「一緒に奔走老人になりませんか」

9 詩歌・随筆・記録・外国文学

9390 質問 老いることはいやですか?

落合恵子著 朝日新聞出版 2016(平成 28)年 251p

深夜放送で「レモンちゃん」の愛称で親しまれた著者も古希を迎え、年と共に丸く穏やかになっているかというと、感情生活の瞬間湯沸かし器は、加齢とともに沸騰までの時間が短縮される始末。日々の暮らしを楽しみながら、社会との間で出来ることを探して、どのようにしたら自分らしく生きられるのかを綴る。「週刊朝日」に2014年から2016年まで連載されたエッセイを収録。

9391 いのちをむすぶ

佐藤初女著 集英社 2016(平成 28)年 121p

94歳まで人のために動いた"東北のマザー"佐藤初女さん。生涯をかけて伝えたかったことを、66の短いメッセージにまとめた。佐藤さんの真実の姿と活動の様子を伝え、食を通して生きる活力を含んだ珠玉のラストメッセージが心にしみてくる。

|9392| モーロクのすすめ 10 の指南

坪内稔典著 岩波書店 2015(平成 27)年 10,211p

俳句や短歌などをテーマに、季節感あふれる産経新聞連載のエッセイをまとめたもの。30年間毎朝あんパンを食べ続け、河馬と柿の木をこよなく愛する「ねんてん先生」の老人指南書。暮らしから、文学から、食べ物から、イタズラから、恋煩いから、10項目にわたって、あなたに最適なモーロクを指南する。

◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆ 愛媛県立図書館 読書会協力図書 新規受入セットのご紹介(一般向け) 平成 29 年版目録掲載

9393 書店主フィクリーのものがたり

カブリエル・セウィン著 早川書房 2015(平成 27)年 322p 島で唯一の書店の主、フィクリーは、妻を亡くしてから孤 独に暮らしていた。ある日、陳列していた貴重書が盗ま れた。もう、盗まれるほどのものはないと、無施錠にして いた店に、2歳の幼女マヤが置き去りにされていた。島 民は、マヤを心配して店を訪れ、ついでに本を買ってい く。愛読家が増え、読書会まで設立される。小さな島の 人々が本を仲立ちに親しくなっていく。

F 小 説

F572 世界の果てのこどもたち

中脇初枝著 講談社 2015(平成 27)年 381p

戦時中、高知県から満洲に家族で移住した珠子は、朝鮮半島出身の美子、横浜の裕福な家庭で育った茉莉と出会い、あることをきっかけに友達になる。しかし戦争は、彼女たちの人生を変え、家族と別れ、生まれた国を離れて……。3人の女性の厳しくもたくましい人生と、生涯変わることのない友情の物語。

F573 戦場のコックたち

深緑野分著 東京創元社 2015(平成 27)年 349p

第二次世界大戦中の合衆国軍で、コック兵となった 19歳のティム。不要となったパラシュートを大量に集める兵士や、一晩で消え失せた 600 箱もの粉末卵、不審死を遂げたオランダ人夫婦……。謎に頭を悩ませ、少ない材料や調理器具で何とか食事を用意し、仲間と語らい、

>

親友を作り、戦闘する青春の日々。

F574 眩(くらら)

朝井まかて著 新潮社 2016(平成28)年 347p

葛飾北斎の娘・お栄は、父の仕事の手伝いをしながら、 絵師・応為(おうい)として筆をとる。眩々(くらくら)する ほどの息吹を描くために。口うるさい絵師の夫の元を飛 び出した 20 代から、面倒な義妹に辟易して弟の家から 旅立つ 60 代までを描く。第 22 回「中山義秀文学賞」を 受賞。